

# 既存産業の復興支援に加えて 新たな地域産業の芽を育成する

## 地域の支援ネットワークの要として産官金連携を推進



第6回

### 気仙沼信用金庫の復興支援(後編)

#### 東

日本大震災による地震・大津波と大規模火災により、未曾有の被害を受けた気仙沼市、

基幹産業である水産業は壊滅的なダメージを負った。その震災から4年が経過し、水産業復興の足取りは徐々に力強さを増してきた。

この地に拠点を置く気仙沼信用金庫は「地域の繁栄なくして、金庫の繁栄なし」をモットーに、官民一体となって、三陸地方の復興をパワフルに牽引している。

前編では、気仙沼信用金庫が行った被災直後の対応から、復興支援強化のための本部体制の整備、

そしてこれまでに展開してきた主要な復興プログラムを紹介した。

後編では、プロパー融資に加えて、震災関連の補助金や外部支援機関の資金なども活用した被災企業の事業再開、また被災地での新規事業の立ち上げに関する支援事例を中心にレポートする。

震災関連の補助金を活用し、基盤産業の復旧・復興を支援

水産都市として発展を遂げてきた気仙沼市にとって、基幹産業である水産業の再生は復興の生命線といえる。

水産業は非常に裾野が広い。漁船の製造・点検・修理には造船所や鉄工所が必要。漁に出るには漁具がいる。水揚げされた水産物は加工所で処理され、冷凍・冷蔵保存される。加工過程で出る魚のアラ等処理する業者や、鮮魚・冷凍品・加工品などを全国に配送するには物流業者も欠かせない。新鮮な水産物は観光の目玉にも

。気仙沼では、このように流通経路の川上から川下まで実に多くの業者が関連し、水産業を一大産業へと押し上げてきたのだ。

震災後、国や県では地域経済に波及効果が大きい基幹産業等の復旧・復興を支援するため、目玉施策としてグループ補助金を創設した。前編で見たとおり、気仙沼信用金庫では、復興支援課(平成27年9月15日より復興支援部)が中心となって、グループ補助金など復興関連の補助金にかかる情報提供、申請支援やつなぎ融資などに積極的に対応してきた。

被災企業の事業再開や既存産業の復興とともに、現在、注力しているのが新たな地域産業の芽を育

てること。そのため、平成25年12月には、(公財)三菱商事復興支援財団、(公財)日本財団の両者と連携して、(一財)気仙沼しんきん復興支援基金を設立。この基金を通じて、利子補給制度やソーシャルビジネス支援助成制度、産業復興支援制度を展開中だ。

信金中央金庫が信金キャピタルとの共同出資で組成した中小企業向け創業・育成&成長支援ファンド「しんきんの翼」の提案にも積極的。同ファンドは、資本または資本性資金を直接供給することを目的に、平成26年6月から運営が開始された。気仙沼信用金庫では信金中央金庫、信金キャピタルと連携して同ファンドでの支援先候補を選定し活用を進めている。

「被災地・気仙沼では、国や地元行政機関、地域事業者の皆様の懸命な努力により、復興に向けて着実に歩が進められておりますが、いまだ多くの住民の方々が避難生活や仮設住宅での生活を余儀なくされております。本格復興に向けた様々な課題も浮き彫りになってきています。真の復興を成し遂げ、

気仙沼を魅力ある町としていくためには、既存産業の復旧・再生のみならず、地域の将来を担う新しい産業の構築や雇用の創出も必要なのです」(菅原務・理事長)

#### 大津波で工場を失うも すぐに事業再開を決断

それでは、気仙沼信用金庫が行った被災地での事業再開の支援事例と、新規事業立ち上げの支援事例について見ていこう。

1 社目は事業再開の支援事例。支援対象となったヨシエイ加工(株)は創業以来、地元気仙沼で水揚げされる原料にこだわって、フカヒレを加工・販売してきた。中華料理の高級食材の代表格であるフカヒレは、サメ類のヒレの部分乾燥等させて加工したもの。フカヒレの姿煮に用いられるのは主に尾ビレ、背ビレの部分だ。

ヨシエイ加工の主な取扱商品は乾燥加工または冷凍加工した業務用のフカヒレ。「フカヒレ生産日本一のみち」である気仙沼において、経験に裏付けされた確かな技術力と長年培った信用力を背景

に、中華食材問屋、全国の高級中華料理店、ホテル等に高級食材フカヒレを販売していた。

「震災のあった年は最高益を出していました。業績がとてまあ調なので、本社の2階でメインバンクの担当者に、仕入資金の追加借入れを相談している最中に、突然、経験したことがないほど大きな揺れに見舞われました。余震も続き、身の危険を感じたので、とにかく着のみのまま、近くのビルの屋上に避難しました」

村上芳二郎・ヨシエイ加工代表取締役は、当時をこう振り返る。

震災発生時、港近くの沿岸部に本社・工場を構えていたヨシエイ加工にも、大津波は容赦なく襲いかかる。建物は全壊。原料や商品もすべて流されてしまった。

真っ先に頭をよぎったのは従業員のこと。通信網も断られた中、とにかく避難所に足を運び、従業員一人ひとりの安否を確認して回った。43人の無事は確認できたが、犠牲者が一人出てしまった。

震災により多くのものを失った村上社長だが、事業再開に向けた